

国立国語研究所学術情報リポジトリ

日本語と韓国語における文末スタイル変化の仕組み：
時間軸に沿った敬体使用率の変化に着目して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): speech style shift, sentence-final style, variation between conversations, variation within a conversation, accordance 作成者: 申, 媛善, SHIN, Wonsun メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002189

日本語と韓国語における文末スタイル変化の仕組み —— 時間軸に沿った敬体使用率の変化に着目して ——

申 媛善

(筑波大学大学院生)

キーワード

スピーチスタイルシフト, 文末スタイル, 会話間の変化, 会話内の変化, 「同調」

要 旨

日本語におけるスピーチスタイルシフトの生起要因は多くの研究から指摘されているが、それがどういった仕組みで行われているのかについては未だ十分な説明がされていない。そこで、本稿では韓国語との比較を通し、日本語のスピーチスタイルシフトが「どのように」起こるのかを考察した。日本語と韓国語による大学院生二者間の初対面会話を、日時を隔て録音し、①回を重ねるにつれての変化（会話間）、②1つの会話内での変化（会話内）の2つの側面から文末スタイル使用率の変化を追った。その結果、日本語会話の場合、会話間においては基本スタイルが敬体から常体に変わり、会話内においては相手のスタイル変化に合わせる「同調」という一定のパターンが存在することが分かった。このことから、日本語話者は基本スタイルをシフトさせる過程で「同調」という手段を取っている可能性があるとは指摘した。「同調パターン」は、韓国語会話でも一部見られたものの、傾向として認めるほどの数には及ばなかった。

1. はじめに

日本語は「デス・マス体」や「ダ体」といったスピーチスタイルが文末形式に組み込まれている数少ない言語である。日本語母語話者は場面や相手によってこれらを使い分けたり、あるいは同一場面・同じ相手でもスタイルの切り替えを行ったりする。このような現象は敬語レベルのシフト（生田・井出 1983）、待遇レベルシフト（三牧 1993）、スピーチレベルシフト（足立 1995、宇佐美 1995、上仲 1997、大浜他 1998）などと呼ばれるが、本稿では、「デス・マス体」や「ダ体」などを一種のスタイルとして捉え、スピーチスタイルシフトという用語を用いることにする¹。

スピーチスタイルシフトは、従来の研究において主に心的要因と文脈的要因によると指摘されてきた。しかし、スピーチスタイルシフトがどういった仕組みで行われているのかについては未だ十分な説明がされていないように思われる。そのため、日本語教育の上でスピーチスタイルシフトについての適切な指導が行われず、日本語学習者がいつまで経っても「デス・マス体」で話し距離を感じたり、あるいは会って間もないのにすぐ「ダ体」で話しかけ違和感を感じたといった話をしばしば聞く。仕組みについての明確な説明が提示されない限り、スピーチスタイルシフトは学習者にとって習得しがたい（宇佐美 1995）項目としてあり続けるしかない。

そこで、本稿では、スピーチスタイルシフトの仕組みを解明するための基盤作りとして、①初

対面から回を重ねるにつれて、②1回の「会話内」で、「デス・マス体」や「ダ体」など、文末のスピーチスタイル（以下、文末スタイル）の使用率がどのように変わっていくのかを観察し、日本語におけるスピーチスタイルシフトの特徴を考察することとする。また、日本語母語話者同士のみでなく、日本語と様々な面で類似性を持ち、敬語体系を有する面でも共通する韓国語と比較することで、日本語特有の性質がより浮き彫りになるよう試みる。

2. 先行研究と本稿の立場

従来のスピーチスタイルシフトに関する研究は、スピーチスタイルシフトが起こる要因について優れた業績を残している。生田・井出(1983)は、社会的コンテキストが談話全体のスピーチスタイル²を決め、「心的態度」と「談話の展開」が談話内で起こるスタイルの使い分けに関与すると述べている。三牧(1993)や宇佐美(1995)においても生田・井出(1983)同様、「心的態度」と「談話の展開」が一定の談話内におけるスピーチスタイルシフトの要因として指摘されている。しかし、これらは文字通り要因であり、スピーチスタイルシフトがどうして起こるかについての説明にはなっていない、どのような様相を見せるのかについてはいまだ十分に記述されていないように思われる。

また、これらの研究はテレビ対談や初対面会話など1回限りの会話を分析対象としており、会話全体を通して「デス・マス体」が最も多く使われ基調となる文末スタイルに変化が見られない。よって、人間関係が親密度を増していく過程でのスピーチスタイルシフトについては説明しきれていないように思われる。管見の限り、唯一この種の現象をとらえようとしたのは大浜他(1998)で、3人の大学生による6回分の会話を資料としスピーチスタイルシフト³現象をマクロ的・ミクロ的に記述している。本稿は、大浜他にならい、一定期間連続して行われた同一話者間の会話を①回を重ねるごと（「会話間」）、②1つの会話内（「会話内」）といった2つの時間軸に沿って分析し、スピーチスタイルシフトの方法を明らかにすることを試みた。その結果、日本語においては相手の変化に合わせる「同調」というパターンが存在することが確認できたが、韓国語では定式化されたパターンは見出せなかった。

但し、大浜他(1998)では、一定の時間における各スタイルの使用率の変化と発話ごとのシフトの両方をスピーチスタイルシフトとして捉えているため、その2つを区別する必要があるように思われる。従来の研究におけるスピーチスタイルシフトは、「デス・マス体」から「ダ体」へ、あるいは「ダ体」から「デス・マス体」へのシフトなど、発話レベルでのシフトのみを意味しているからである。そこで、本稿では、各スタイルの使用率の変化を見る際には「基本スタイルの変化」や「敬体使用率の変化」などの用語で表現する。3.2節で後述するように、本稿はスタイル使用率の変化を中心に分析を進めるが、6節では会話例を用い発話ごとの変化も考察することから、スピーチスタイルシフトという用語を取り入れる。このような「各スタイルの使用率の変化」と「スピーチスタイルシフト」を総称し「文末スタイルの変化」とする。

以下の3節で調査手順と分析方法を、4節以下では調査結果と考察を述べていく。

3. 研究方法

3.1. 調査手順

調査は2004年の6月から7月にかけて筑波大学中央図書館のセミナー室で行われた。会話参加者は初対面の日本語母語話者6人、韓国語母語話者6人である。日本語と韓国語の純粋な比較のためには日本語の学習経験がない人にするのが望ましいが、同じ韓国語話者の日本人との日本語会話も今後併せて分析する関係上、今回の韓国語話者は日本に滞在し日本語レベルが上級に達している者とした。

1回の会話時間は10分とし、同一相手と数日間の日時を隔て3回会話してもらった。録音の日付は話者同士で都合が合う日にしたため、1回目から3回目までの収録に要した期間は必ずしも一定ではない。短いペアで3日、長いペアで3週間近くかかった場合もある。録音実施日についての詳細な情報は、資料Aを参照されたい。1回目は「つくばの生活」、2回目は「夏休みの計画」、3回目は「昨日の出来事」といった話題を提示したものの、それに縛られず自由に話すよう指示した。会話参加者には予め場所を連絡し、2人が揃った時点で、話題を言ってから筆者は退室した。10分経過した時点で筆者が部屋に入り会話を中断させた。

会話は、日本人同士、韓国人同士でそれぞれ母語によるものを1セット、日本人と韓国人の組み合わせで日本語によるものを1セットずつ行ってもらったが、今回の分析にあたっては、日本人同士、韓国人同士による母語の会話（日本語と韓国語）のみを対象とする。会話参加者が全ての会話を終了した直後に、フォローアップアンケートとフォローアップインタビューを行った。アンケートでは宇佐美(1995)や伊集院(2001)を参考に会話の自然さや相手の印象などを確認した。インタビューでは①日常生活の上での「ダ体」と「デス・マス体」の使い分け及びスピーチスタイルシフトに対する意識、②今回の調査においてのスピーチスタイルシフトに対する意識、意識的にスピーチスタイルシフトを行うようにしたか、どのような時に「ダ体」を用いるようにしたか、③テーマによって話しやすかったり、話しづらかったりしたか、④特に話がはずんだ時や話に詰まって困った時などがあったかなどの質問を柱としてスピーチスタイルシフトに対する認識を確認した。会話参加者の属性及び組み合わせは表1の通りである。

表1 調査協力者の組み合わせ

	日本語会話		韓国語会話	
1	J1 (24. M1)	J2 (24. M2)	K1 (24. M1)	K2 (25. M1)
2	J3 (23. M1)	J4 (23. M1)	K3 (24. M2)	K4 (24. R)
3	J5 (24. M2)	J6 (24. M2)	K5 (27. M1)	K6 (27. M2)

* J：日本語母語話者，K：韓国語母語話者。括弧内は調査当時の年齢と学年を表す（M：修士課程，R：研究生）。

会話参加者は全員を20代半ばの女性で大学院生とすることで社会的条件を統制した。各組における2人の話者はできるだけ年齢、学年において同等になるよう調整した。これは、社会的格差を小さくした方が文末スタイルの変化がより顕著に見られると予測したためである。

今回分析対象とするデータは、日韓各々、女性3組による3回ずつの会話、計18会話（各10分）であり、一般化できる数ではない。以降、日本語（話者）・韓国語（話者）と述べることがあるが、それはあくまで今回のデータに基づく結果の範囲であることを明記しておきたい。

3.2. 文末スタイルの分類及び分析方法

上記の手法で収集した会話を宇佐美(2003)に従って文字化した。各発話の文末スタイルは、日本語は伊集院(2001)を、韓国語は李(2002)の基準に修正を加え、敬体(P)、常体(N)、中途終了型発話(NM)の3種に分類した。本研究における敬体とは日本語の場合「デス・マス体」、韓国語の場合それに相当する「해요 hayyo 体」・「합니다 hapnita 体⁴」である。常体は日本語の「ダ体」と韓国語の「해 hay 体」・「한다 hanta 体」とした。中途終了型発話は、両言語において述部がなくスタイルを判断できない発話の他、文法的には終了しているが、上昇や下降イントネーションが表れず平板のまま引き伸ばされている発話、あるいは文法的にも終了しておらず言いよんでいる発話を含む。

使用率の変化に関する記述方法は以下の通りである。

(1)「会話間」：1回ごとの会話における3種のスタイルそれぞれの使用率を算出し、3回の会話間に見られる使用率の変化を記述する。

(2)「会話内」：10分間の会話を2分区切りにし、2分ごとの経過に伴う使用率の変化を記述する。

(1)は、基本スタイルが回を重ねるにつれ変わるかどうかを見るためのものである。ここで、基本スタイルとは、三牧(1996)の基本的待遇レベルに相当するものを指す。三牧は「特定の人間関係および場面で基本として選択・設定される待遇レベル」を「基本的待遇レベル」とし、「①他の待遇レベルより、高率で選択される、②談話中、他の待遇レベルにシフトすることがあっても、シフトが一時的なもので、再び元の待遇レベルに戻るといった特徴がある」としている。本稿では三牧を参考に、各回でもっとも多く使われたスタイルをその回における基本スタイルとした。(2)では、日韓両言語における1回目の会話の基本スタイルを抽出し、より細かい時間軸を設定してその変化を追った。その上、会話を行う2人による使用率の変化を比較することで両者のインターアクションの過程でのスタイルシフトの特徴を明らかにすることを試みた。

4. 「会話間」における各スタイルの変化

本節では日韓両言語による1回目の会話において共通する基本スタイルがあるのか、またそれは回を重ねるにつれてどのように変化するかを確認するために、それぞれ計3回の会話で3つのスタイルの使用量がどのように変わっていくのかを考察した。特に基本スタイルの変化についてはフォローアップインタビューから得られた話者の意見を参考に考察を進めた。

4.1. 日本語会話

日本語会話は日本語母語話者6人による3組の会話データを得た。まず、日本語会話の話者1

人1人の結果を見ると、敬体が1回目の基本スタイルであった場合が3人で、2人は中途終了型発話、1人は常体を基本スタイルとしていた。さらに3回目までの推移を見ると、6人のうち4人が常体に関しては増加傾向を、敬体に関しては減少傾向を示していた。以下はJ5、J6ペアによる1回目と3回目の会話の一部である。以下、会話例に使われた記号については巻末の資料Bを参照されたい。

例1) J5、J6 ペア、1回目：互いの自己紹介

発話番号	発話者	発話内容	スタイル
9	J6	何年生ですか？	P
10	J5	私は院の2年ですね。	P
11	J6	あ、じゃ、同じ年ですね。	P
12	J5	本当ですか。	P
13	J6	私、環境研なんですよ。	P
14	J5	あ、そうなんですか。	P
15	J6	どちらですか？	P
16	J5	私はですね、えーと、数理物質の「研究科名」で（おー）学類は「学類名」でした。	P
17	J6	あ、そうなんですか。	P

* P = 敬体、以下同様。



例2) J5、J6 ペア、3回目：「昨日の出来事」の一部

発話番号	発話者	発話内容	スタイル
116	J6	昨日、昨日は何を？	NM
117	J5	昨日ね、それがね、特に何もしてない気がするんだよね<二人笑い>。	N
118	J6	何もしてないって<笑い>。	NM
119	J5	だから、昨日の話とかいわれた際にあっ、やばいと思ったんだけど。	N
120	J6	私も。	NM
121	J6	あ、ない。	N

* N = 常体、NM = 中途終了型発話、以下同様。

例1)、2)が示すように、1回目の会話では2人とも敬体を使っているが、3回目の会話では中途終了や常体が多く用いられていることが分かる。

日本語話者のフォローアップインタビューの中には、「常体を使えば心的距離が近づいたように感じる」、「相手に常体を使われたら話しやすく楽だ」などの意見が少なくない。これは日本語話者が同年代の相手に対する常体使用に好感を持っていることの表れだと思われる。

日本語話者の場合、敬体から常体への基本スタイルの変化は多く見られたが、中途終了型の使用率については、人によって若干の差が見られたものの、3回の会話を通じてほぼ一定しており、大きな変化は見られなかった。

4.2. 韓国語会話

一方、韓国語会話においては、6人全員が1回目の基本スタイルとして敬体を使用していた。また、3回を通して敬体が常体を上回り、3つのスタイルがほとんど変化しないか常体と中途終了型に若干変化が表れる程度にとどまっているものがほとんどであった⁵。

以下の例3)、例4)は、例1)、例2)同様、互いの自己紹介と、「昨日の出来事」について話している場面である。1回目の会話の一部である例3)のみならず3回目の会話の一部である例4)でも敬体が主流となっていることが分かる。

例3) K3, K4 ペア, 1回目: 互いの自己紹介

発話番号	発話者	発話内容	スタイル
11	K3	언제 오신 건데요? いついらっしゃったんですか ⁶ 。	P
12	K4	저는 2년 전이요<웃음>。 私は2年前です<笑い>。	P
13	K3	석사...? 修士...?	NM
14	K4	지금 석사 2학년이요。 今修士の2年です。	P
15	K3	어느 과...? どこの研究科...?	NM
16	K4	「K4의 연구과명」요。 「K4の研究科名」です。	P
17	K3	아-, 저는 「K3의 연구과명」에요。 あー、私は「K3の研究科名」です。	P



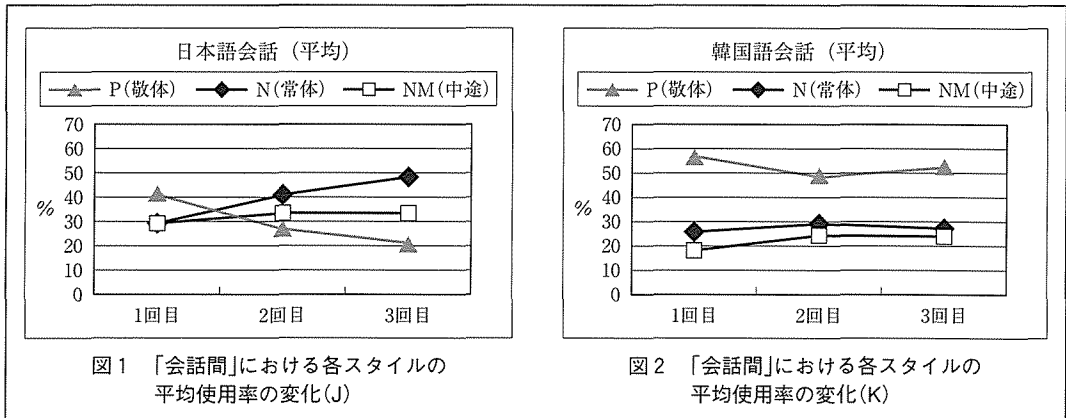
例4) K3, K4 ペア, 3回目: 「昨日の出来事」の一部

発話番号	発話者	発話内容	スタイル
70	K4	저두 어제 술 먹었어요。 私も昨日お酒飲んだんです。	P
71	K3	진짜요?。 本当ですか?	P
72	K4	저는 낮에, 아침에는 동경에 일 있어갖구 갔다 가요, 뭐 논문 쓰는 거 땀에 그거 땀에 잠깐 갔다가 왔다 와서 테니스를 몇 시간 치고,, 私は昼間、朝は東京に用事があって行ってきたんですけど、論文のために、あれのためにちょっとだけ行ってきてから、テニスを何時間かやって,,	
73	K3	테니스요?。 テニスですか?	P
74	K4	예, 제가 요즘 테니스를 치거든요。 はい、私、最近テニスをやっているんですよ。	P
75	K3	오-。 おー。	
76	K4	한 일주일에 두 번 정도 치나。 一週間に二回くらいかな。	N
77	K3	진짜요?。 本当ですか。	P
78	K4	예, 근데 두 번인데 가끔 같이 칠려면 치자고 같은 연구과 애들하고。 はい、でも二回だけど、たまに一緒にやろうと思えばやったり、研究科の友達と。	NM
79	K4	여기 저희 연구과엔 테니스 라켓이랑 다 있어요。 うちの研究科にテニスラケットとか全部あるんですよ。	P

フォローアップインタビューで韓国語のスピーチスタイルシフトについて聞いたところ、6人の内3人が「相手が同年代であれば常体に変えましょうと声を掛け合って、それをきっかけに敬体から常体へ移す」と答えている。今回、韓国語会話は3つとも両者の年齢を同一か一歳の差に調整したものの、上述のような両者間のスタイル変更についての交渉は見られなかった。会話参加者によると、録音されている上に相手が同じ年とはいっても早生まれであった(K3)ことと常体に移行するほど親しくなったとは思わなかった(K6)とのことだった。

4.3. 日本語会話と韓国語会話の比較

4.1節、4.2節では日本語会話と韓国語会話におけるそれぞれ6人の文末スタイルの使用率が回を重ねるにつれどのように変化していたかを述べた。両言語における6人の平均を示すと図1、図2のようになる。横軸が1回目から3回目までの時間の流れを、縦軸が全発話に占める各スタイルの割合を表す。



日本語会話と韓国語会話ともに1回目においては敬体使用率の方が常体使用率より高い。しかし、図1の日本語会話においては2回目から常体が多く使われるようになり基本スタイルが敬体から常体へ変わっている。一方、図2の韓国語会話では3回目になっても依然として敬体が優勢であり、基本スタイルの変化は見られない。

このように、日本語会話と韓国語会話は1回目の基本スタイルが敬体であることでは一致したものの、3回を通しての変化の様子は異なっており、日本語会話では基本スタイルが敬体から常体へと変化するのに対し、韓国語会話では敬体が維持されていた。

4.4. まとめ

以上、「会話間」におけるスタイル使用率の変化を概観した。1回目の会話では、日本語話者6人中3人、韓国語話者6人全員が敬体を基本スタイルとしていた。言語にかかわらず初対面という条件が影響し、敬体が基本スタイルに設定されたケースが多かったと思われる。しかし、その変化は日本語会話と韓国語会話で異なっており、日本語会話では回を重ねるにつれ敬体が減少

し常体が増加する傾向が、韓国語会話では、最後まで敬体が維持される傾向が見られた。

5. 「会話内」における敬体使用率の変化

4 節では、1 回目から 3 回目までの時間軸、つまり、「会話間」におけるスタイル使用率の変化を考察した。回を重ねるごとの変化の様子は日韓で異なったものの、1 回目の会話における基本スタイルは敬体が多かった点では共通していた。本節では、1 回目の基本スタイルであった敬体に着目し、その使用率がどのように変化、あるいは維持されるのかを見るために 1 回分ごとの会話をより細かい時間で区切り考察する。

5.1. 日本語会話

図 3 は日本語話者 3 組によるそれぞれ 10 分間の会話を 2 分区分けにし、敬体使用率の変化を追ったものである。横軸が 2 分ごとの時間の経過を示し、縦軸が 2 分間の発話数に対する敬体の割合（2 分間に現れた敬体の数を同時時間帯の総発話数で割り百分率を算出したもの）である。発話の定義に関しては宇佐美(2003)に従った。下の表 2 には 10 分間の全発話数に対する敬体の数とその割合、2 分ごとの全発話数に対する敬体の数とその割合を提示した。

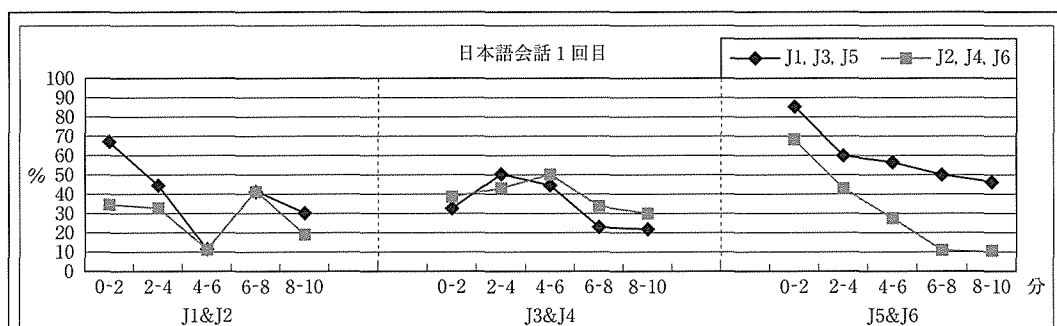


図 3 「会話内」における敬体使用率の変化（日本語会話 1 回目）

表 2 全発話数に対する敬体の数の割合（日本語会話 1 回目）

	会話全体		0-2分		2-4分		4-6分		6-8分		8-10分	
J1	36/79	45.6%	17/25	68.0%	5/11	45.5%	1/8	12.5%	8/19	42.1%	5/16	31.3%
J2	27/100	27.0%	9/26	34.6%	4/12	33.3%	2/19	10.5%	7/17	41.2%	5/26	19.2%
J3	48/136	35.3%	10/30	33.3%	13/26	50.0%	13/29	44.8%	6/26	23.1%	6/27	22.2%
J4	50/127	39.4%	11/28	39.3%	11/25	44.0%	14/28	50.0%	6/18	33.3%	8/28	28.6%
J5	38/59	64.4%	18/21	85.7%	3/5	60.0%	8/14	57.1%	3/6	50.0%	6/13	46.2%
J6	22/64	34.4%	11/16	68.8%	3/7	42.9%	6/22	27.3%	1/9	11.1%	1/10	10.0%

* J は日本語母語話者を表す。00/00 は各時間帯における敬体の数 / 全発話数を示す。

日本語会話における 3 つのグラフは、それぞれ増加と減少の幅は異なるものの、3 組とも 2 つの折れ線の動きが似ていることが分かる。例えば、J1, J2 ペアの場合、会話を始めて 2 分まで

の間、J2 が 3 割程度の割合で敬体を使用しているのに対し、J1 は 7 割近くを敬体で話しており、両者間の敬体使用には相当の差が見られる。しかし、2 分から 4 分までの間に J1 が J2 に歩み寄りを見せ、4 分以降はほとんど同程度の使用率を表しながら増加と減少を繰り返している。J3、J4 ペアも J1、J2 ペアと増減の具合は異なるが、2 つの折れ線の動きが近似している。J5、J6 ペアの場合、時間の経過とともに両者の使用率の差は開いていくが、2 つの折れ線とも下降している点で共通する。

このように話者 2 人による使用率が同様の軌跡を描く傾向を「同調パターン」と呼ぶこととする。その判断については、時間ごとの変化の傾向が 75% 以上同一であるか否かを基準とする。つまり、グラフにおいて 5 つのドットによって形成された 4 つの線のうち、3 つ以上が増加減で一致することを条件とした。例えば、J1、J2 ペアの場合を図 3 と表 2 を照らし合わせながら見てみよう。0 - 2 分で J1 と J2 の敬体使用率はそれぞれ 68.0% と 34.6% だったが、2 - 4 分では 45.5% と 33.3% にともに減少している。4 - 6 分では 12.5%、10.5% と 2 - 4 分からするとさらに減少するが、6 - 8 分では、42.1%、41.2% と、ともに増加している。8 - 10 分では、31.3%、19.2% と、再び減少している。その結果、4 つの線が下降、下降、上昇、下降ですべて一致し、「75% 以上同一であること」という条件を満たしているため「同調パターン」と判断した。

J1、J2 ペアの「同調パターン」は 1 回目に限らず 2、3 回目においても観察されている。図 4 は、J1、J2 ペアの 1 回目から 3 回目における敬体使用率の変化をグラフで表したものである。

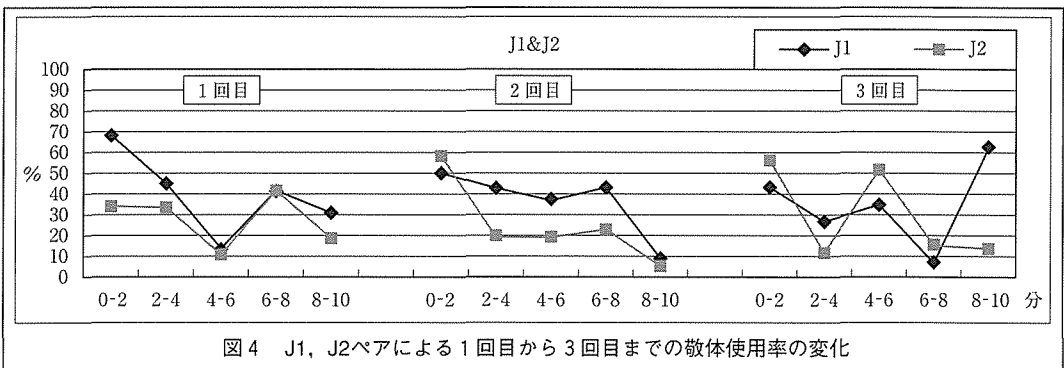


図 4 J1、J2 ペアによる 1 回目から 3 回目までの敬体使用率の変化

2 回目において、J2 による折れ線のうち 2 - 4 分と 4 - 6 分のドットから成る線が直線に近いようにも見えるが、20% から 19% と、わずかながら減少し、同一空間における J1 の減少と一致する。従って、下降、下降、上昇、下降と 4 つの線とも一致するため「同調パターン」と判断した。3 回目では、最後の 6 - 8 分と 8 - 10 分の 2 つのドットによる線が不一致であるが、他の 3 つの線の動きが一致していたため「同調パターン」とした。紙幅の関係上、他のペアの結果を全て提示することはできないが、日本語会話計 9 つのうち、J3、J4 ペアの 2 回目の会話 1 つを除く 8 つの会話において「同調パターン」が観察された。

本節では 2 分間における敬体の比率を観察しており、個々の発話ごとのさらなる検証が必要で

はあるが、以上のことから、日本語話者同士の会話では相手の変化に合わせるといった「同調」をスピーチスタイルシフトの主な方法としているものと考えられる。

5.2. 韓国語会話

次に韓国語会話を観察してみよう。以下の図5に韓国語話者3組による1回目の会話の様子を示した。図5の3つのグラフは、増減の繰り返しはあるが、3つとも全体的に敬体使用率が高いのが特徴的である。「会話間」において韓国語会話は基本スタイルの変化がほとんどなく、敬体が終始多用されていたが、「会話内」にもその傾向が反映されていると考えられる。

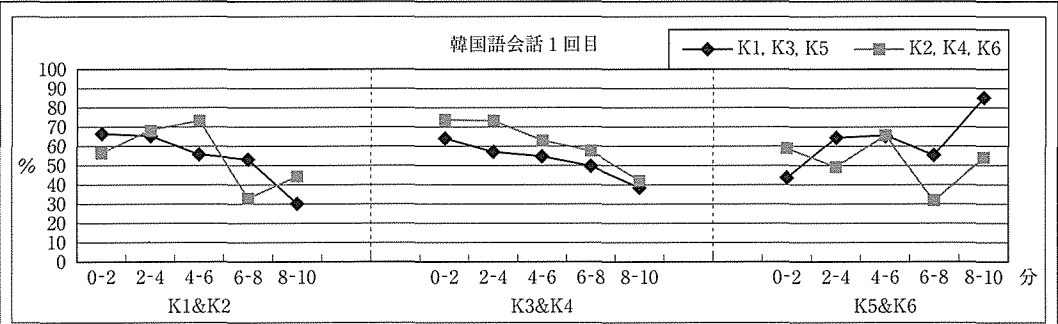


図5 「会話内」における敬体使用率の変化（韓国語会話1回目）

表3 全発話数に対する敬体の数の割合（韓国語会話1回目）

	会話全体		0－2分		2－4分		4－6分		6－8分		8－10分	
K1	74/136	54.4%	22/34	64.7%	17/26	65.4%	15/27	55.6%	12/23	52.2%	8/26	30.8%
K2	55/99	55.6%	14/25	56.0%	12/18	66.7%	16/22	72.7%	6/18	33.3%	7/16	43.8%
K3	69/134	51.5%	14/22	63.6%	15/26	57.7%	13/24	54.2%	13/26	50.0%	14/36	38.9%
K4	80/133	60.2%	16/22	72.7%	21/29	72.4%	18/29	62.1%	12/21	57.1%	13/32	40.6%
K5	73/119	61.3%	11/25	44.0%	14/22	63.6%	14/22	63.6%	16/29	55.2%	18/21	85.7%
K6	59/112	52.7%	16/27	59.3%	7/14	50.0%	13/20	65.0%	6/19	31.6%	17/32	53.1%

* Kは韓国語母語話者を表す。00/00は各時間帯における敬体の数／全発話数を示す。

「同調パターン」は、K1, K2ペアの2回目、K3, K4ペアの1回目、K5, K6ペアの3回目と、3ペアに1回ずつ表れ、計9つの会話のうち3つ、つまり3分の1にとどまっていた。但し、韓国語会話における「同調パターン」は、その性質が日本語会話とは違うものと思われる。図5の1回目の会話においてK3, K4ペアは、「下降・下降・下降・下降」と4つの線の動きが一致しており、「同調パターン」を示している。しかし、3回目までの経緯を見ると、日本語会話との違いが明らかになる。以下にK3, K4ペアによる1回目から3回目までの「会話内」の結果を示す。

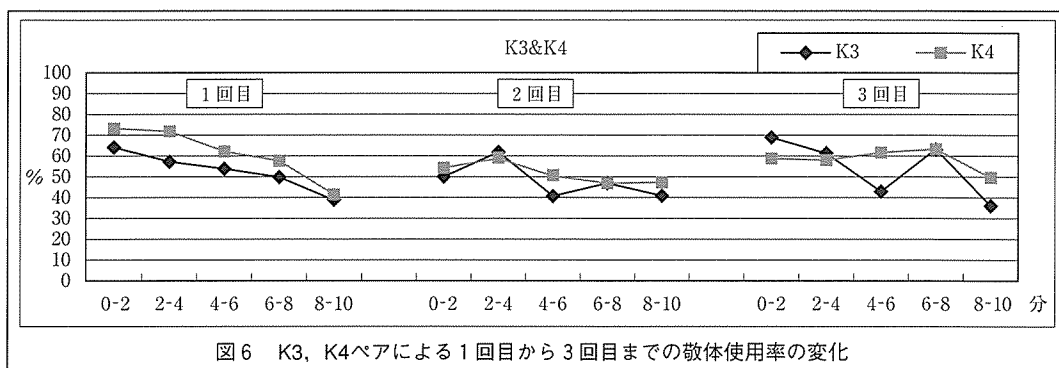


図6 K3, K4ペアによる1回目から3回目までの敬体使用率の変化

図6において、K3, K4 ペアによる折れ線は1回目では「同調パターン」を見せたが、2, 3 回目では2つ以上の線の動きが不一致で「同調パターン」ではなかった。ここで、K3, K4 の話者2人とも終始40%以上敬体を使っていることに注目していただきたい。2つの折れ線は40%～70%強という比較的高い割合を中心として小幅な変化が見られるだけで日本語に見られるようなダイナミックな変化は観察されない。このことから、1回目において「同調パターン」として表れた折れ線の動きは、K3とK4があまりスタイルシフトを行わず敬体を用い続けたことによる偶然である可能性も考えられる。そのような傾向は先ほど提示した図4の日本語会話と比較するとより明らかになる。日本語会話の敬体使用率は、ほとんどの場合、折れ線が高低にダイナミックに動きながら「同調」している。それに比べると、K3, K4 ペアの動きはほぼ平行線に近い。

このように、日本語会話では一貫して「同調パターン」が目立つのに対し、韓国語会話では変化はあるものの高い比率で敬体が使われ続けており、日本語と韓国語は敬体を用いた文末スタイルの運用の仕組みが異なるものと推測される。

5.3. まとめ

4 節において回ごとのスタイル使用率を調べ「会話間」の変化を観察した結果、1 回目の会話の基本スタイルは日本語、韓国語ともに敬体が多く、日本語会話の特徴として回を重ねるにつれて敬体が減少し常体が増加する傾向が浮き彫りとなった。それに基づき本節では「会話内」における敬体使用率の変化に注目した。1 回10分の会話を2 分で区切り、話者2 人の使用率を比較した結果、日本語会話では「同調」という一定のパターンが存在することが分かった。「会話間」において敬体が減少し、常体が増加する傾向が表れたことと合わせて考えると、日本語話者は基本スタイルをシフトさせる過程で相手のスタイル変化に合わせる「同調」という方法を取っていると思われる。このような「同調パターン」は、韓国語会話でも一部見られたものの、傾向と言えるほどの数には及ばず、日本語会話のように現象として認められるには至らなかった。次節では日本語のスタイルシフトにおける1つの方法であると考えられる「同調」について、会話の内容を追いながら話者間のインターアクションを観察することによって、詳細に考察することとする。

6. 「同調」について

本節では、敬体使用率の変化において「同調パターン」が表れている箇所を取り上げ、実際の会話がどのように行われているかを考察する。5節における図4と図6を照らし合わせながら日本語会話のJ1, J2ペアと韓国語会話のK3, K4ペアの例を見ていくこととする。

6.1. 日本語会話

以下の例5)は、図4のJ1, J2ペアの1回目、2-4分台の最後の部分から4-6分の最初の部分で行われた会話である。J1とJ2による2つ目の直線が互いに接近しながら下降している部分に当たるといえよう。例5)はJ2のサークルであるアイスホッケー部の話題に続き、アイスホッケーを素材としたドラマのことが話されている部分である。J2は自分に関係する話題が続き発話量が多くなるにつれ文末を中途終了型で終えることが多くなっている。一方、J1は最初、78行のように「あ、そうなんですかね、やっぱり」などと、敬体であいづちを打っていたが、85～86行目で俳優の名前を教えることをきっかけに93行、97行においては「あ、そうなんだ」「そっか、その効果もあるんだ」というふうに常体に変わっている。このように、J2が語り手となり、J1が語りの受け手としてふるまうというインターアクションにおいてJ2もJ1も敬体を使わなくなり、図4の2-4分ではそれぞれ約50%と30%あまりあった敬体の使用率が、4-6分の間では2人とも10%程度まで減っている。

例5) J1, J2ペア, 1回目, 2-4分後半&4-6分前半: アイスホッケーを素材としたドラマ

発話番号	発話者	発話内容	スタイル
77	J2	毎年、プレーヤーで3, 4人入ったら、まあ、そんなもんだろうと (<笑い>) 思ったのに、今年はプレーヤー 9 人入って、マネージャー 1 人入って、10人入ってプライド効果っていうか、	
78	J1	あ、そうなんですかね、やっぱり。	P
79	J2	ドラマでやってたせいで知名度 (ああ)、知名度上がったのかなっていうふうに。	NM
80	J1	あ、なんか週刊誌とかにもよく載ってましたね。	P
81	J2	なんかキムタクがホッケー中に怪我をさせられたとか。	NM
82	J1	<笑いながら>うん。	N
83	J1	あと、なんか、この人が格好いいとか、女性週刊誌に載ってましたよ。	P
84	J2	なんかね、あれは、あれはというか、佐藤こうた??、なんかモジャモジャって。	NM
85	J1	あ、モジャモジャ?。	N
86	J1	佐藤りゅうた?。	N
87	J2	りゅうた?。	N
88	J2	佐藤りゅうたが東京の、あのう、女子チームの練習に来たらしくて (ううん)、その、ある女子チームに知り合いがいて (うん)、この間来たとゆって<二人笑い>。	NM
89	J2	初心者のかせにけっこううまくいったよってゆって。	NM
90	J1	へー。	
91	J2	あ、あの人のはけっこうまいんだって (<笑い>)。	NM

92	J2	キムタクは（うん）なんかはまったから（うん）クラブチームに入るか（うん）、自分でチーム作るかっていって（へー）続けたいと言っているらしくて。	NM
93	J1	あ、そうなんだ。	N
94	J2	うん。	N
95	J2	まあ、実際どうなるか分からないけど。	N
96	J2	あれは…,,	
97	J1	そっか、その効果もあるんだ。	N

一方、例6)はJ1, J2 ペアの1回目、6-8分台の前半で行われた会話である。図4の1回目における3つ目の直線のところで、敬体が増加している部分に当る。例5)から約1-2分後であるこの場面でもアイスホッケーに関連するドラマの話が続いている。124行までJ2がドラマの中と実際の様子は違うということを話すと、それに関連して125行においてJ1が「そういえば、なんか自分と近いやつがテレビでやってたら違うよと思いますよね」と新たな話題を持ち出す。J2は126行、128行の「そう、そう」、「あ、方言ある」と、話題が展開されてすぐは以前の話題展開上の主なスタイルだった常体と中途終了型を混用している。しかし、133行の「これ偽者とか言いますよね」というJ1の確認要求に対し、134行で「方言とか真似しても真似できないですよ」と文末スタイルを敬体に変えて応答し、以降はほとんど敬体で話している。その結果、2-4分、4-6分間で下降していた直線が6-8分間で増加することになる。

例6) J1, J2ペア, 1回目, 6-8分前半：方言と出身

発話番号	発話者	発話内容	スタイル
120	J2	試合中にベンチに、ベンチっていか控えのベンチに（うん）いないってこと自体がおかしいし（＜笑い＞）、遅刻してくるってことがおかしくて。	NM
121	J1	＜笑いながら＞そっか。	N
122	J2	ありえない設定だよ（ああ）っていうふうに、うちはさむって言って見てたけど,,	
123	J1	知くらないと＞ {＜ ,,	
124	J2	＜知らない＞ {> 人はたぶんホッケー格好いいと言ってたかもしれない。	N
125	J1	そういえば、なんか自分と近いやつがテレビでやってたら違うよと思いますよね。	P
126	J2	そう、そう。	N
127	J1	なんか、方言とかでも,,	
128	J2	あ、方言ある。	N
129	J2	えと、どちら…？。	NM
130	J1	私は群馬なんであんまテレビで出てこないんですけど。	P
131	J1	なんか関西とかだと,,	
132	J2	何とかやねみたいな。	NM
133	J1	これ偽者とか言いますよね。	P
134	J2	方言とか真似しても真似できないですよ。	P
135	J1	うん。	N

136	J1	え、どちらですか？。	P
137	J2	私福岡なんです、九州。	P
138	J1	あー。	
139	J2	でも方言出なくて。	NM
140	J1	へー。	
141	J2	実家に帰ったり、友達としゃべると出るんですけど。	P
142	J2	こっちに来て標準語の人としゃべると標準語でしゃべれるんですよ。	P
143	J2	たまに単語がおかしい（＜笑い＞）かもしれないんですけど。	P

このように、5.1節で数値的に確認された日本語会話における「同調パターン」は、実際の会話内容を追うことによって確認できる。また、J1が敬体、J2が非敬体で不一致であった両者の文末スタイルが、例5)では非敬体で、例6)では敬体で一致してきたことから、前者はJ1がJ2の非敬体に、後者はJ2がJ1の敬体に合わせたと考えられる。このように、「同調」は話者1人が相手に一方的に合わせるのではなく話者同士が影響し合いながら行われた結果であることが分かる。ここでは紙幅の関係上提示できなかったが、このような双方による影響は他のペアでも観察されており、日本語話者に共通して見られる傾向であると考えられる。

さらに、例5)と例6)を観察すると、「同調」は相手の発話に対し何らかの形で応接している発話において起こりやすいと考えられる。例えば、相手の質問に答えたり、相手の発話に理解を示したり、あるいは相手の発話内容に補足を加えるなど、内容的に密接な関連を持ち、かつ、位置的にも隣接している発話同士を単位としているのである。以下の例7)は例5)を、関連を持つ発話同士で区切ったものであるが、1つ目のやりとりにおいては不一致だった両者間の文末スタイルが、やりとりを重ねるにつれ次第に合っていくことが分かる。

例7) 例5)の一部再掲：関連を持つ発話同士で区切った例

発話番号	発話者	発話内容	スタイル
77	J2	毎年、プレーヤーで3, 4人入ったら、まあ、そんなもんだろうと（＜笑い＞）思ったのに、今年はプレーヤー9人入って、マネージャー1人入って、10人入ってプライド効果っていうか、	
78	J1	あ、そうなんですかね、やっぱり。	P
79	J2	ドラマでやってたせいで知名度（ああ）、知名度上がったのかなっていうふうに。	NM
80	J1	あ、なんか週刊誌とかにもよく載ってましたね。	P
81	J2	なんかキムタクがホッケー中に怪我をさせられたとか。	NM
82	J1	＜笑いながら＞うん。	N
85	J1	あ、モジャモジャ？。	N
86	J1	佐藤りゅうた？。	N
87	J2	りゅうた？。	N

91	J2	あ、あの人はけっこうまいんだって（＜笑い＞）。	NM
92	J2	キムタクは（うん）なんかはまったから（うん）クラブチームに入るか（うん）、自分でチーム作るかっていって（へー）続けたいと言っているらしくて。	NM
93	J1	あ、そうなんだ。	N
94	J2	うん。	N
95	J2	まあ、実際どうなるか分からないけど。	N
96	J2	あれは…,,	
97	J1	そっか、その効果もあるんだ。	N

1つ目のやりとりまでは関連する発話間の文末スタイルがJ1は非敬体、J2は敬体と一致していないが、2つ目の81行目で「なんかキムタクがホッケー中に怪我をさせられたとか」といった中途終了型でのJ2の働きかけにJ1が「ううん」と笑いながら話すことから常体へのシフトが起こっている。その後3つ目のやりとりで、ドラマに出演した俳優の名前を思い出す過程において常体のやりとりが続き、以降4つ目、5つ目ではJ1、J2、2人とも中途終了型か常体で発話を終えるようになり、敬体からの逸脱ということで一致している。

では、「同調」していない箇所ではどういったことが起きているのだろうか。図4におけるJ1、J2の1回目～3回目の敬体使用率は、ほとんどの時間帯でJ1とJ2による変化の動きが「同調」しているが、3回目の8-10分の間だけはずれが生じている。以下に該当する時間帯の会話の一部を提示する。以降話者2人による関連発話は、点線で区切り表示することとする。

例8）J1、J2ペア、3回目、8-10分後半：引越しの予定と家賃

発話番号	発話者	発話内容	スタイル
215	J2	来年から（うーん）都内で働くんですけど。	P
216	J1	そっか。	N
217	J1	就職するんですか？。	P
218	J2	就職で。	NM
219	J1	もう決まってるん…？。	NM
220	J2	決まって、もう都内就職するんで（うん）、神奈川よりに住もうと思ってて（うん）。	NM
221	J2	向こうのクラブチーム入ってて。	NM
222	J1	ほ[驚いたように]。	
223	J2	あのう、スポーツで。	NM
224	J1	今も入ってるんですか？。	P
225	J2	今もやってて。	NM
226	J2	だから、横浜まで（うん）今毎週通ってて。	NM
227	J1	えー、＜すごい＞ < 。	N
228	J2	<練習しに> > 。	NM
229	J2	だから、そこの練習にも行きやすくて,,	
230	J1	で、会社にも。	NM

231	J2	会社にも行きやすい，ちょうど中間地点に住もうと思って。	NM
232	J2	それが川崎くらいじゃないかと思って。	NM
233	J1	<笑い>	
234	J2	一人勝手に盛り上がってて，調べてたらやっぱ，なんか，ね（うん），こっちの基準で慣れてると，やっていけないと思って。	NM
235	J1	高いですよ，もう。	P
236	J2	駐車場がなんで2万もするのって。	NM
237	J1	駐車場にへたしたら人が住めますからね，こっちは。	P
238	J2	そう，駐車場に住めちゃうみたいな。	NM
239	J2	都内とかで，駐車場一月3万とかで。	NM
240	J1	ありますよね。	P
241	J2	こっちで普通人住めるよみたいな。	NM
242	J2	風呂，トイレ付いて住めるみたいな。	NM
243	J2	だから，車も手放さないといけないかなと考えつつ。	NM
244	J2	なくても生きていけるし。	N
245	J1	そうですね。	P

図4の3回目，8-10分のところを見ると，J1の敬体使用率が急激に増加したのに対しJ2は若干減少し，両者による使用率の変化にずれが生じている。例8）にもそういった結果が反映されており，J2はほとんど中途終了型発話を用いているのに対し，J1は217, 224行と235行以降で敬体使用が目立つ。発話内容を見ると，「就職することに伴う引越し」や「引越し先の家賃」など，J2が自分に関連する情報を提供しながら話し続け，J1が聞く立場となっている。その中で，J2は文末を主に「て形」など中途終了型で終わることが多く，まだ話が終わっていないことを表示することで発話権を維持しているものと考えられる。一方，J1はJ2の話の聞きながら，「就職するんですか」，「今も入ってるんですか」など相手に確認を求めたり，235行以降では住まいや家賃など相手が持ち込んだ情報に対し意見及び評価をしている。このように明示的に相手に向けた質問や確認要求，相手の判断に対し自分の意見を加える発話において，J1は敬体を用いる場合が多いことが確認できる。

6.2. 韓国語会話

「同調パターン」における関連発話同士に基づいた文末スタイルの変化は，韓国語会話でも見られる。以下は，K3，K4による1回目の会話の一部であり，3組ある韓国語会話の1回目のうち，唯一「同調パターン」が表れた会話である。6-8分の最後から8-10分の最初のやりとりで，図6においてK3，K4ペアのグラフが横ばいに近い状態から少し下降気味に変わった部分に当る。

例 9) K3, K4ペア, 1回目, 6-8分後半 & 8-10分前半 : 引越し先の状況

発話番号	発話者	発話内容	スタイル
213	K4	광열비 같은 거 다 나눠 쓸 거 아녜요. 光熱費とかは割り勘にするんですよね。	P
214	K3	예, 나눠 써요. ええ, 割り勘ですね。	P
215	K4	그럼 사실 그렇게 비싸지도 않겠다 그렇게 생각하면. だったら, そんなに高くないかも, そう思うと。	NM
216	K3	편하고. 気楽だし。	NM
217	K4	근데 룸메이트를 잘 만나야 그것두. でも, ルームメイトに恵まれないと, それも。	NM
218	K3	그쵸, 그쵸. そうです, そうです。	P
219	K4	잘못 만나면 고생하잖아요. へたすると苦勞するじゃないですか。	P
220	K3	그쵸, 그쵸. そうです, そうです。	P
221	K3	고생 고생이지. 苦勞, 苦勞。	N
222	K4	그쵸. そうですよ。	P
223	K3	애가, 일본엔데 애가 참 팬찮은 거 같아요. その子, 日本人だけど, いい子だと思います。	P
224	K4	다 한국 사람이에요?. みんな韓国人居ますか?。	P
225	K3	다 일본애들. みんな日本人。	N
226	K4	일본 사람이에요?. 日本人なんですか?。	P
227	K3	일본애, 말레이시아 여자애. 日本人, マレーシア人の女の子。	N
228	K4	아, 그럼 더 팬찮을 수도 있겠네. あ, だったらよけいもいいかもしれないな。	N
229	K3	남자에 두 명 있으니까 문제긴 한데. 男の人も2人いるから問題だけど。	N
230	K3	근데 남자애두 다 친구니깐. でも, 男の人もみんな友達だから。	NM
231	K4	아-, 그 쯤 불편한 건 있겠다. あー, それはちょっと不便かもしれない。	N
232	K4	후로같은 데 들어 갔다 나올 때. 風呂に入ってあがるとき。	NM
233	K4	같이 쓸 거 아녜요, 후로도. 一緒に使うんでしょう, 風呂も?。	P
234	K3	건 모르겠어요. それは分かりません。	P
235	K3	충마다 후로가 있을지. 階ごとに風呂があるかどうか。	N
236	K3	뭐가 어떻게 있을지 잘 모르는데 남자애들이 2층인가, 1층인가 쓰고 여자애들이 2층인가 쓰고 그러니깐. 何がどうなっているのか分からないけど, 男の人が2階か1階を使っ て, 女の人が2階を使ったりするから。	NM
237	K4	아-, 그렇구나. あー, そうなんだ。	N
238	K3	계속 꼬지고 있는데 막... ずっと誘われているんだけど...	NM
239	K4	<웃음> <笑い>	

日本語と違って敬体からの逸脱が長くは続かないが, 220行までは2人とも敬体が主流だったのが, 221行から敬体と非敬体で2人のスタイルにずれが生じ, 229行以降から非敬体で一致するやりとりが多くなっている。但し, J1, J2ペアでは語りが続く状況やあいづちにおいて敬体から逸脱する傾向があったが, K3, K4ペアでは独り言(작년에 여름에 그냥 뭐지, 아, 한국 말이 생각이 안나(去年の夏に, だから, 何だろう, あ, 韓国語が思い出せない)など)や相手の発話に対し自分の意見を表明する際にまるで独り言のような語調で言う発話(例9の215, 228, 231-232行など)に逸脱が目立った。このような中途終了型や常体にシフトしやすい

発話の種類および日韓の差については2節で挙げた三牧(1993), 宇佐美(1995)との関連も合わせ稿をあらためて論じたい。

では, 韓国語会話においてずれが生じているところはどうだろうか。例10) は K3, K4 ペアによる3回目の会話の一部で, 図6において K3 の折れ線が K4 のそれに比べ急激に下降している4-6分の間で行われた内容である。

例10) K3, K4ペア, 3回目, 4-6分前半: 昨日の出来事と明日からの予定

発話番号	発話者	発話内容	スタイル
118	K4	거기 되게 좋은 데 있는데 아세요? あそこ, すごいいいところあるけど, 知ってます?。	P
119	K3	어디요? どこですか?。	P
120	K4	거기, 1 학군 연못 있죠. あっち, 1 学の池あるじゃないですか。	P
121	K4	연못 있구 그 앞에 1 학군 식당 있구, 거기 나가면 왜 벤치처럼 돼 있잖아요, 테라스 막 있구. 池があって, その前に 1 学の食堂があって, そこから出るとベンチあるじゃないですか, テラスのそこ。	P
122	K3	아아. ああ。	
123	K4	거기 되게 술 먹기 좋아요. あそこ飲むのにもってこいなんですよ。	P
124	K3	그러게요. そうですね。	P
125	K4	거기 되게 좋아요. あそこはいいですよ。	P
126	K4	많이 <갔었어요>(<.>). けっこう <行ってきました> < 。	P
127	K3	<어저께>(<.>) 애들 많던데. <昨日> > , 人多くて。	NM
128	K4	어, 그래요? あ, そうですか。	P
129	K3	밤중에 <깜깜해졌는데도>(<.>),, 夜中で <暗くなってるのに> < ,,	
130	K4	<여름이라 또>(<.>) ###이 또 뛰어 나겠구만. <夏だし, また> > # # # が目立ただろう。	N
131	K4	거기 막 음악도 나오고 그래요, 어쩔 때는. あそこ, 音楽も流れたりするんですよ, たまに。	P
132	K4	싸클 애들이,, サークルの人たちが,,	
133	K3	아, 맞다, 맞다. そう, そう。	N
134	K4	음악 싸클 애들이 연습하잖아요. 音楽サークルの人たちが練習するじゃないですか。	P
135	K3	예. はい。	P
136	K4	거기서 <막 좋은>(<.>) 음악 나오고 그래요. あそこで <すごいいい> < 音楽が流れたりするんですよ。	P
137	K3	<맞어>(<.>). <そう> >	N
138	K3	그렇구나. そうか。	N
139	K4	응. うん。	N
140	K3	우리는 내일하고 모레 츠쿠바 산 가서,, うちは明日とあさって筑波山に行って,,	
141	K4	어, 진짜요? あ, 本当ですか。	P
142	K3	실습 나갈 거 뭐냐, 설명회?? 実習の, あのう, 説明会??	N
143	K4	무슨 실습 나가는데요? 何の実習ですか?。	P

144	K3	중, 초등학교 나가가지구 애네들 체육수업이랑 부활동 어떻게 운영되고 있나 그런 거. 中・小学校に行つてあそこの体育授業や部活がどういふふう運営されているのか、 まあ、そんなこと。	N
145	K4	아, 선생님을 하는 거예요, 아니면 가서 감독을 하는 거예요? あ、先生をやるんですか、それとも行って何か監督をするんですか？。	P
146	K3	보고 전학하고。 見て見学したり。	NM
147	K4	아-。 あー。	
148	K3	조사하고 앙케이트하고 이런 건가 봐요。 調査したりアンケートとったりそんなことみたいです。	P
149	K4	아-。 あー。	

例10) はK4が「昨日の出来事」という3回目のテーマと関連し、「昨日は飲み会だった」という話をした後、「最近は天気がよく外で飲んでもいい」という話に続く会話である。118行から139行までは「外で飲むにいい場所」について主にK4が語る立場となっているが、K4が敬体を中心に使っているのに対し、K3は133行辺りから「そう、そう」など、常体であいづちを打つようになり2人でずれが生じている。140行以降で、語る立場がK3に変わってからこのようなK3の非敬体使用とK4の敬体維持は続き、その結果がグラフ上にも反映されたと思われる。

以上、日本語会話と韓国語会話の「同調」している例とそうでない例を観察した。日本語話者は相手の文末スタイル変化に敏感に反応し、内容的に関連する発話を巧みに利用し非敬体へのシフトを試みていると考えられる。反面、韓国語では、今回のデータには現れなかったものの、フォローアップインタビューで述べられたように(4.2参照)明示的な言語行動を通じてスタイルシフトを行うこともあるため、相手のスタイルの変化、また、それに合わせた自分のスタイルの変化をあまり考慮しない可能性もある。この点に関しては今後、韓国語のスピーチスタイルシフトの仕組みに対する考察を加え、追究していきたい。

7. おわりに

以上、「会話間」と「会話内」という二重の時間軸に沿ってスタイル使用率の変化を考察した。その結果、日本語会話では、①「会話間」において回を重ねるとともに基本スタイルを敬体から常体に変える、②「会話内」において相手のスタイル変化に「同調」といった2つの傾向が見出された。これらの結果から考えられることとして、②から、「同調」が日本語におけるスピーチスタイルシフトの1つの方法である可能性を指摘した。また、①と②から、日本語話者同士は、相手に合わせる「同調」という方法でその場その場でスピーチスタイルシフトを行いながら徐々に基本スタイルを敬体から常体へ変えていくのではないかと考えられる。さらに、実際の会話のやりとりを観察することで、日本語における「同調」は、ある話者が相手に一方的に合わせて行うのではなく、互いに影響し合う結果であり、そこには、内容的に密接な関連を持つ発話間でのスタイルの一致という規則が働いていることを述べた。一方、韓国語会話では、3回を通して基本スタイル(敬体)に変化がなく、「会話内」において若干「同調パターン」が見られたものの、日本語会話ほど顕著ではなかった。しかし、韓国語における「同調パターン」は、相手の

スタイル変化に合わせることに由来するものというより、あまりスタイル変化を行っていないため結果的に同じようになったと思われる、日本語のそれとは異なると判断される。

但し、3.1節でも述べたように、今回得られた結果は20代半ばの女性同士による数的にも限られたデータに基づいたものである。今後は、データのバリエーションや数を増やし結果の信頼性を追求していくとともに、日本語学習者の文末スタイルの変化に注目し日本語母語話者のそれと比べることで日本語教育への応用を考えてみたい。また、今回明らかにすることができなかった韓国語に作用するスピーチスタイルシフトの仕組みについても研究していきたい。

注

- 1 本稿においてスピーチスタイルシフトという用語を用いる理由は、「デス・マス体」を+、「ダ体」を-あるいは0などと、敬語あるいは待遇の面からレベルづけしてしまうと、「デス・マス体」は丁寧で「ダ体」は丁寧でない印象を与えやすいと考えたことにある。一般的に「デス・マス体」の方が「ダ体」より丁寧であるのは事実だが、場合によっては距離を取るための「デス・マス体」より親しみを表す「ダ体」の方が丁寧に受け止められることもある。管見の限り、スピーチスタイルシフトという用語を初めて使ったのは、伊集院(2001)である。
- 2 生田・井出(1983)本文では、「敬語のレベル」となっている。
- 3 大浜他(1998)ではスピーチレベルシフトという用語を用いている。
- 4 厳密に言うと、「합니다 hapnita 体」は格式性を持つという点から「해요 hayyo 体」と区別されるが、両方とも相手に敬意を表す文体であることや、今回のデータで「합니다 hapnita 体」がほとんど出現しなかったことから、2つを1つの項目にまとめた。
- 5 韓国語話者のうち、常体と敬体の使用率が逆転しているのはK6のみである。
- 6 日本語訳は筆者によるものである。なるべく直訳を試みた。

参考文献

- 足立さゆり(1995)「日本語の会話におけるスピーチ・レベル・シフト」『拓殖大学日本語紀要』5, 73-87, 拓殖大学留学生別科
- 李恩美(2002)『丁寧度を示すマーカーのない発話の日韓対照研究－その機能を中心に－』東京外国語大学大学院地域文化研究科 修士論文
- 生田少子・井出祥子(1983)「社会言語学における談話研究」『月刊言語』12(12), 77-84, 大修館書店
- 伊集院郁子(2001)『母語場面及び接触場面におけるスピーチスタイルの分析－ボライトネス理論の観点から－』東京大学大学院総合文化研究科 修士論文
- 上仲淳(1997)「中上級日本語学習者の選択するスピーチレベルおよびスピーチレベルシフトー日本語母語話者との比較考察ー」日本語教育論文集－小出詞子先生退職記念編集委員会編『日本語教育論文集－小出詞子先生退職記念ー』, 149-165, 凡人社
- 宇佐美まゆみ(1995)「談話レベルから見た敬語使用ースピーチレベルシフト生起の条件と機能ー」『学苑』662, 27-42, 昭和女子大学近代文学研究所
- 宇佐美まゆみ(2003)「改訂版：基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』, 4-21, 平

成13-14年度科学研究費補助金基盤研究C(2)研究成果報告書

大浜るい子・鈴木雅恵・多田美有紀(1998)「自由談話に見られるスピーチレベルシフト現象」『中国四国教育学会 教育学部研究紀要』44(2), 389-397, 中国四国教育学会
 三牧陽子(1993)「談話の展開標識としての待遇レベル・シフト」『大阪教育大学紀要』第I部門(人文学部) 42(1), 39-51, 大阪教育大学
 三牧陽子(1996)「待遇レベル・シフト」『言語教育の領域』, 437-445, 大学書林

謝 辞

本稿は、2004年度に筑波大学大学院地域研究研究科に提出した修士論文の一部に加筆修正を加えたものである。会話データの収録にご協力くださった皆様に厚くお礼を申し上げます。また、筑波大学の砂川有里子先生をはじめ、岡崎敏雄先生、西村よしみ先生、澤田浩子先生、永井涼子氏、本誌査読者の方々から貴重な助言をいただきました。記して心から感謝の意を表します。

《資料》

A 会話録音実施日(実施年度:2004年)

	日本語会話 1	日本語会話 2	日本語会話 3	韓国語会話 1	韓国語会話 2	韓国語会話 3
1 回目	6 月15日	6 月21日	6 月16日	6 月17日	6 月30日	6 月18日
2 回目	6 月18日	6 月23日	6 月18日	6 月21日	7 月 1 日	6 月25日
3 回目	6 月22日	6 月28日	6 月23日	6 月23日	7 月 3 日	7 月 1 日

B 記号凡例

- 。 1 発話文の終わりにつける。
- ,, 発話文の途中で相手が割り込んだ場合、前の発話文が終わっていないことを表す。
- ? 疑問文につける。疑問の終助詞がついた質問形式でなくても、語尾を上げるなど、疑問の機能を持つ発話には、発話末に「?。」をつける。
- ?? 確認などのために語尾をあげる、いわゆる「半疑問文」につける。
- … 文中、文末に関係なく、音声的に言いよんだように聞こえるものにつける。
- () 相手の発話中に打たれたあいづちはその発話の最も近い部分に()にくくって入れる。
- < > 笑いながら発話したものや笑い等は、< >の中に説明を記す。もし、相手の発話の途中に、相手の発話と重なって笑いが入った場合は、(<笑い>)とする。
- < > |<|, < > |>|
 - 同時に発話されたものは、重なった部分双方を< >でくくり、重ねられた発話には、< >の後に、|<|をつける。また重ねた方の発話には< >の後に |>|をつける。
- 「 」 固有名詞等、話者のプライバシー保護のために明記できない単語を表すときに用いる。
- ### 聞き取り不能であった部分につける。

(投稿受理日：2007年 1 月31日)

(最終原稿受理日：2007年 5 月17日)

申 媛善 (しん うおんそん)

筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻応用言語学領域

305-8571 茨城県つくば市天王台1-1-1

won_suns@yahoo.co.jp

On the mechanism of variation in sentence-final style in Japanese and Korean:

With special reference to the variation in the usage rate
of the polite form along the time axis

SHIN Wonsun

Graduate Student, University of Tsukuba

Keywords

speech style shift, sentence-final style, variation between conversations,
variation within a conversation, *accordance*

Abstract

There have been many studies that focused on the reason why speech style shift occurs in Japanese, while few past researches explain what kind of mechanism it involves. Therefore, this paper focuses on how the speech style shift occurs in Japanese, through comparison with Korean. I recorded conversations between pairs of Japanese and Korean graduate students who did not know each other at first and further conversations at intervals of days. I observed the variation in the usage rate of sentence-final style on the basis of the two aspects, namely, i) which are the variations between conversations, across several conversations of same participants, and ii) the variations within each conversation. The results showed that, on one hand, the basic style of speech varied from the polite form to the non-polite form between conversations in Japanese and on the other hand, there exists some kind of *accordance* which is invariable within a conversation. Based on these results, this paper argues that there is a possibility that Japanese speakers take a particular measure which is *accordance*, a measure by which speakers shift their basic speech style to match their discourse with the interlocutor's variation in speech style. Unlike in Japanese conversations, patterns of this *accordance* are only partially found in Korean conversations.